巻頭言

「最後のセンター長」

大学教育機能開発センター長　齋藤　陽一

「最後のセンター長ですね。」 国立大学教養教育実施組織会議の懇親会の場でだったろうか？　以前、新潟大学に勤務され、他大学へ転出された方から、そう言われた。その言葉通り、昨年の10月から、大教センターという略称は残ったものの、「大学教育開発研究センター」から「大学教育機能開発センター」へと名称が変更になった。だから、私は、最後の大学教育開発研究センター長であり、かつ、最初の大学教育機能開発センター長である。「研究」という言葉がなくなり「機能」という言葉が入った。その違いは何だろうか？　だが、その前に、簡単に今までのセンターについて振り返っておきたい。

今までのセンターは、平成17年度に全学教育機構ができた時を境として、大きくその性格を変えた。そもそも、大学設置基準等の大綱化に伴い、新潟大学では教養部の教員は既存の各学部に分属、そのために教養教育の実施組織が必要になり、センターがその任にあたってきた。従って、全学教育機構が、教養教育は勿論、学部の教育についても一定程度関わる実施組織として現れた時、センターは必然的にその性格を変えねばならなかった訳だ。そして、むしろそうなった時の方が、「教育開発研究」という名前にふさわしい組織になったと言えるかもしれない。先進的な教育事例研究、あるいは、効果的な授業の開発という活動を通して。

それが、今度は、「教育開発研究」から「教育機能開発」への衣替えである。ここにはどのような差違があるのだろうか。以下、私の勝手なイメージなのだが、今までは、先進的な事例の紹介、教材開発や教育に関する研究の報告を通じて新潟大学の教育活動に貢献してきた。そこには、紹介や報告があれば、教員はそれを取り入れ、教育改善に努めるはずであるという、いわば「教員性善説」が前提にあった。だが、いまやそんな悠長なことは言っていられない。FD 実施の義務化、あるいはますます熾烈になる大学間競争という現実を前にして、積極的に「教育機能」の「開発」をめざして打って出なければならない立場に置かれたのだと言ってよいだろう。FD に特化した組織としての活動が期待されている。

こう書いていて、実は、罪悪感を感じないでもない。センター長としての私の任期は、２年で、この年報が発行されるころには、別の方がセンター長に就任されているのではないかと思う。前任の濱口先生の６年間と比較して、あまりに短く、お叱りを受けそうだが、４月からは全学教育機構の別のセンター長に就任する予定であるので、お赦しを頂きたい。そして、この場を借りて、教職員を初めとする皆様からの、センターの活動に対するこれまでのご協力に感謝申し上げて、この巻頭言を閉じたいと思う。

ありがとうございました。